

ローヌ河下流領域の初期中世彫刻についての調査報告

— ロゼット装飾についての試論

奈良澤 由 美

城西大学 現代政策学部

要 旨

西ヨーロッパの初期中世の石造彫刻の年代比定は概して簡単ではない。特に地方工房における制作である場合、検証のための根拠が乏しいことが多い。本論考はニームのギュイヌメール遺跡から2016年に出土した彫刻石材と、ローヌ河下流領域に残されている比較作例の研究調査の報告である。「ロゼット」と現在呼ばれる円形の装飾モチーフが、初期中世の地元工房の彫刻モチーフのレパートリーとして頻繁に登場するようになった状況について分析し、時代的・地域的にさらに広い比較研究を行いながら、当モチーフと地方工房の活動についての試論を述べる。

キーワード：初期中世、彫刻、装飾、ロゼット、ニーム、ガリア、カンケッリ

はじめに

ニーム（フランス国ガール県）のギュイヌメール遺跡にて2016年の発掘調査で発見された彫刻の研究調査を、本論考は出発点としている⁽¹⁾。ニームやアルルのような古代都市を抱くローヌ河下流領域は、ローマ帝政期の数多のモニュメントが存在する。一方、古代ローマ世界が瓦解した後、初期中世の地域工房の活動について、残されている資料は多くない。

本論考では、ニーム周辺に発見されている5～7世紀に年代比定が可能な彫刻群を分析しながら、ガリア南東部の古代末期の地域工房のモチーフと技術について考察する。とくに、「ロゼット」と現在呼ばれる円形の装飾モチーフについて広く比較調査を行いながら、初期中世の地域工房の活動について試論を述べたいと考える。

1. ニームのギュイヌメール遺跡出土の角柱

2016年の発掘調査により2体の角柱が出土した。ギュイヌメール遺跡はニーム市のレザムルー地区北部にあり、発掘調査は、個人宅建設に先立つ事前発掘として、INRAP (Institut national de recherches archéologiques préventives) により行われた⁽²⁾。

この地域には、古代より街道沿いに発達した墓地が広がっており、今回の発掘では、古代末期

から初期中世にかけての130基の墓と、さらに5世紀にその建設年代が比定されている半円形の建造体の基礎部分が発見された。この建造体は、キリスト教聖堂のアプシス部分であろうと発掘者により推定されている。多くの古代の石材が再利用されており、おそらく近隣に大きな墓廟建築があったのではないかと推測される。

2体の角柱は、半円形構造体の後陣に位置する中世中期の墓〔SP1165, US1210〕に再利用されている状態で発見された⁽³⁾。貝殻を含蓄する地元産の石灰岩製のこれらの角柱には、垂直面に縦溝が掘られており、至聖所ないし聖人崇敬の場の囲い（カンケッリ）の一部と解釈される。それぞれの角柱を以下に記述する。

- 角柱1 (図1)

上部の欠損が目立つ。幅は23.5cm x 15cm、高さは73cm程度。4面の垂直面のうち、角を成して接する2面(図1-b.c.)に縦溝が掘られている。溝の幅は6~8cm、深さは4cm程度。幅広の面(図1-b.)の縦溝は、下から24cmの高さのところまで削り落とされている。この切削は4~5cmの厚さでなされ、切削部分の溝は消失している。幅狭の面(図1-c.)の縦溝はそのままに残されており、溝は下から12cmの高さまで伸びている。

他の垂直面2面には浅浮雕装飾が施されている。幅広の面(図1-d.)には、直径20cmほどの6弁のロゼット模様が縦に並んで2つ彫られている。幅狭の面(図1-a.)には、直径12cmほどの小さめの同形のロゼット模様が、やはり2つ縦に並んでいる。幅広面(図1-d.)の下端12cmは滑らかにされており、ごつごつとした表面のままである。

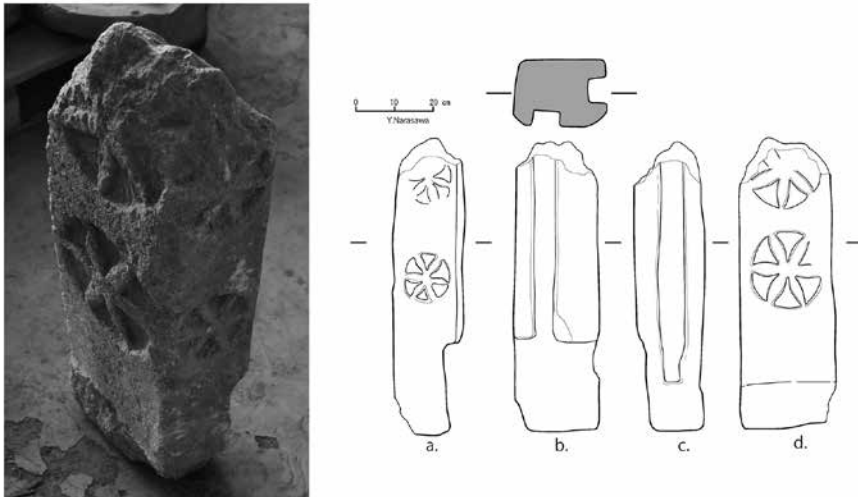


図1 ニーム、ギュイヌメール遺跡、角柱1 [inv. no. 1210-13]

- 角柱2 (図2、3)

幅は24cm x 17cm、高さは73cm。上部に欠損はあるが、上面の一部が残されている。幅広の

面（図2-c.）は直径18cmほどのロゼット模様が縦に並んで2つ浅浮彫でされている。その下に3つ目のロゼット模様が未完成のままに浅い刻線で表されている（図3）。そのきれいな円弧によりコンパスが使用されていることがわかる。この面の下端12cmは表面が滑らかにはされないままに凸凹に残されている。この装飾面に接する2つの垂直面（図2-b.d.）に縦溝が掘られている。溝の幅は3.5~4cm、深さは5.5~6.5cm。縦溝は下から12cmの高さから上端まで伸びている。

角柱1および角柱2は、円柱を再利用している。円柱の膨らんだ面が、両角柱に残されている。角柱1については溝のある垂直面の角の部分に（図1-b.c.）、角柱2については装飾面の裏側の面に（図2-a.）、再利用された円柱の表面が残されている。円柱の直径は35~37cmほどであり（図4）、この2体の角柱はひとつの円柱を半分縦に切断して作られたか、あるいは同型の円柱から作られた。

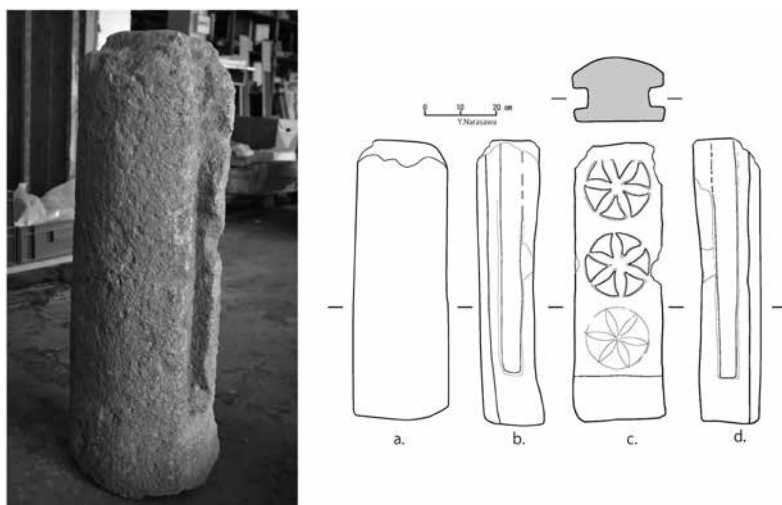


図2 ニーム、ギュイヌメール遺跡、角柱2 [inv. no. 1210-16]



図3 角柱2の正面および細部



図4 角柱1および2の断面図

この2体の角柱の機能については、何らかの礼拝の場の囲み（カンケツリ）の構成要素であったと推測される⁽⁴⁾。縦溝に挟まれていた板については、該当するような遺物は何も発見されていない。木製であった可能性もある。縦溝の配置から、角柱1は囲いの角部分に、角柱2は両側に板をおいて囲いの1辺の中間部分に置かれたことが判別される。

半円形プランの建造体については、機能は明確ではない。内部空間の幅は5mほどであり、キリスト教時代の墓地の聖人崇敬と礼拝に関わる建物であったとの推定が妥当であろう。

縦溝の位置と下端の表面の処理から判断すると、角柱は最初は床面から12cm下まで埋め込まれるように制作されていた。その後、なんらかの理由で、構想が制作途中に変更され、さらに深く、24cm下まではめ込まれた。そのことは、角柱1の幅広面（図1-b.）の下部が削り落とされていること、そして角柱2の幅広面（図2-c.）のロゼットが未完成のまま残されていることから推測される。角柱1の装飾はあらかじめロゼットは2つのみであり、設置すべき場所の状況に応じて柔軟に対応したのではないか。現地近くで材料を調達し、その場で臨機応変に制作していた状況がうかがえる。石材として用いた円柱は、周辺の墓地のなんらかの古い墓廟から再利用したのではないかと⁽⁵⁾。

それではなぜ構想の変更が行われたか。深さ12cm程度を床下にはめ込むことは、こうした囲み（カンケツリ）の角柱について一般的であるが、24cmは深すぎる。たとえば、設置すべき空間の床面の段差が想定され、設置場所が各種の墓が集まるなどで床面に対しての調整が必要になったのではないかと。また、24cm床下になった場合、上部は49cmであり、かなり低い。元々の角柱の高さは73cm程度で、祭壇域の囲いは通常100cm前後であることも考えても、祭壇域の囲いであったという想定は難しい。聖人崇敬の何らかの対象物の囲いであった可能性が高いであろう。

中世中期の墓⁽⁶⁾に再利用される形で発見されたこの2体の角柱は、よって現地のすぐ近くで地元の工人により制作された。縦溝の作りはしっかりしており、古代末期から初期中世のカンケツリの支柱の形態を有している。制作年代としては、半円形建造物の建築年代と推定される5世紀以降、カンケツリの装飾と様式が共通化するカロリング朝時代よりも前の時期と見做すのが妥当であろう。周辺地域に残されている比較作例を次に見ていきたい。

2. ローヌ河下流領域の比較作例

ローヌ川下流地域に、ロゼット模様をメインモチーフとした初期中世の彫刻作例が複数伝わっている（図5）。これらは前述のニームのグエイヌメール遺跡出土の角柱と、地域のおよびおそらく時代的に近い作例と位置付けられる。

アルル（ブーシュ＝デュ＝ローヌ県）のサン＝ピエール＝ド＝ムレレス小聖堂由来の2体のカンケッリの断片のうちの1体に、浅浮彫でロゼッタ装飾が並んでいる⁽⁷⁾。現存する断片の中に、ロゼッタのモチーフは横に3列、縦に3段、残されており、それぞれが円の中に収められている（図6-a）。三葉形のアプシスを持つこのアルルの小聖堂は、古代墓地を起源とするアリスカン墓地内に位置し、中世および近世に再築・改修されているが、その起源は古代末期に遡る⁽⁸⁾。1868年に後陣から発見された碑文⁽⁹⁾により、530年に43歳で死んだペトルスが建立した「聖ペテロと聖パウロのバシリカ *basilica sancti Petri et Pauli*」にその起源が同定されており、カンケッリの断片もそのバシリカに由来するであろう。2断片は材質と形態と由来の経緯が共通して

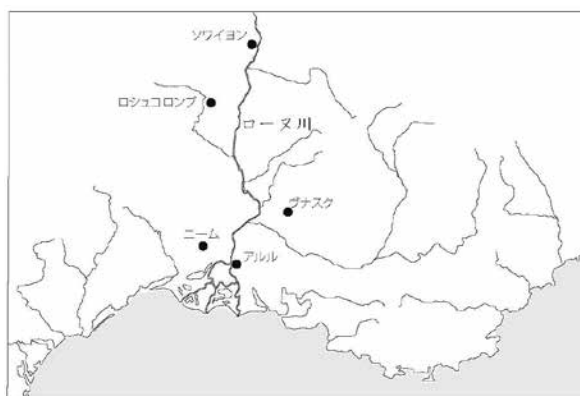


図5 ローヌ川下流地域の比較作例

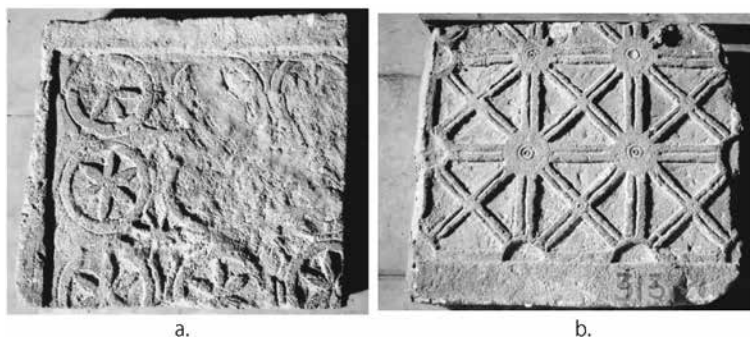


図6 アルル、サン＝ピエール＝ド＝ムレレス小聖堂由来の彫刻石板断片
(Cl.: Musée d'Art et d'Histoire de Genève)



図7 ソワイヨンの小教区教会で発見された彫刻石板



図8 ソワイヨンの小教区教会で発見された彫刻石板（装飾細部）

おり、おそらく再利用の際に両者ともに切断されたと推測される⁽¹⁰⁾。もう1体の断片（図6-b.）には格子の装飾が浅浮彫で彫られている。格子は2本の細板からなる縦棧、横棧、斜棧からなり、それらの棧の交差部分には円形の鎮止めが表されている。こうした格子柵表現は、紀元後4-6世紀の石造のカンケリに頻繁に登場するが、碑文が伝える年代も加味すると、アルルの2体の彫刻断片の制作年代については、6世紀前半が妥当であろう。地元産の石灰岩製であり、地元工房の製作と見做し得る。

次いで、ソワイヨン（アルデシュ県）の作例（図7、8）であるが、1960年代末から1970年代前半に、小教区教会で司祭が行ったアマチュア発掘により発見されている⁽¹¹⁾。大きな矩形の石板であり、6つの断片に壊れたものを現在つなぎ合わせた状態であり、片方の端および角1つが欠落している。石板の残存する3側面は垂直で、上面の内側は3.5cmほど掘り下げられており、その窪みの周囲はくり型で装飾されている⁽¹²⁾。こうした形態は、初期キリスト教時代の祭壇卓と類似するが、掘り下げた窪みの表面にロゼット模様の装飾が彫られているのは祭壇卓としては異例である。6弁のロゼットのモチーフはそれぞれ円に収められ、横に3列、縦に2列並んでいる。ロゼットの大きさはほぼ同一であり、直径は22cmほど。それぞれにコンパスが使用されている。非常に小さいが、コンパスの軸の穴がロゼットの中心および周囲の円上の6か所に残っているのが識別できる（図8）。ロゼット・モチーフの整列の間隔は均等ではなくずれがあり、6つのロゼットのうち1つは大部分が欠落、1つは未完成のままである。この石板とともに多数の石造遺物が発見されており、6体のキリスト教碑文断片は6-7世紀に年代比定されている⁽¹³⁾。また18を数えるカロリング朝時代の彫刻断片も出土している⁽¹⁴⁾。ロゼットの装飾が再利用の際



図9 ロシュコロンプ（アルデシュ県）、サン＝ピエール＝ド＝ソーヴプランタド聖堂、柱頭



図10 ヴナスク、ノートル＝ダム＝ド＝ヴィー聖堂、司教ボエティウスの墓 (Cl.: *Les temps mérovingiens. Trois siècles d'art et de culture (451-751)*, Paris, 2016, p. 149)

に彫られたという仮定も可能であり、機能および年代の同定は難しい。

ロシュコロンプ（アルデシュ県）のサン＝ピエール＝ド＝ソーヴプランタド聖堂の апсисの凱旋アーチをさされる2本の柱の柱頭⁽¹⁵⁾では、円に囲まれた6弁のロゼットが前面に3つ並び、側面には各弁の中間を直線で区切った大きめの6弁ロゼットが置かれている（図9）。彫刻は斜面彫りであり、より工芸的な端正な様式となっている。

ヴナスク（ヴォークリューズ県）のノートル＝ダム＝ド＝ヴィー聖堂に伝わっている彫刻石板⁽¹⁶⁾（図10）については、そこに彫られた碑文から、この石板が司教ボエティウスの墓であることを知ることができる。形状から、石板はおそらく墓の蓋であり、彼の死の年は604年と推定されている。碑文の下には大きなラテン十字架が浅浮彫で表され、十字架の横棒にはA（アルファ）とW（オメガ）の文字、碑文の上と十字架の横棒の上には、X（キー）とI（イオタ）の組み合わせ文字であるクリスモンが収められた円が表されている。そしてそれらのクリスモンとよく似た姿で表された6弁のロゼッタ模様を収める円形モチーフを、碑文の上のクリスモンの横、そして十字架のアルファとオメガの文字の下に見つけることができる。

ニームの墓彫刻群

ニームおよびその周辺から、様式および図像が共通する一群の石造彫刻群が発見されてい

る⁽¹⁷⁾。その形とモチーフから墓に関連する彫刻、とくに墓の蓋だったのではないかと推測される。多くが19世紀後半から20世紀前半という古い時期に、そしてどれも元のコンテクストを失った状態で偶然に発見されており、現在すべてがニームの博物館のコレクションとなっているが、半数以上は発見の状況が分かっていない⁽¹⁸⁾。

確実に同グループに分類される作例として10体を数えることができる⁽¹⁹⁾。そのうち、ほぼ完形を残しているのは4例、他は断片である。1例を除いて、共通して想定される形態は長い矩形の石板であり、その上面であつただろうと推定される面のほぼ全体に浅浮彫で装飾模様が彫られている。すべてが地元の石灰岩製であり、その彫刻の技術も決して高いとはいえない。限られた地域内に一定の期間行われた地元工房生産に由来することが推定される。

ほぼ完形であるうちの2体は、170cm強の長さ、50cm強の幅を有している⁽²⁰⁾。この大きさと形から、墓の上に置かれる蓋としての用途を果していたと考えるのが自然である。両方ともに上面の短辺側の両端15cmほどは彫刻が施されず荒い表面がそのままに残されている。その端を除いた装飾は、ジグザグ模様や斜め格子模様が刻線で彫られた端5~8cm幅の帯部分と、その内側部分からなり、内側の装飾部分は複数の段に分けられている。1体 (INV. M0455_2015.scu.17) では3段に分けられ、両端の段は対のアーチと三角形、中央の段の中心には6弁のロゼット模様、その周辺に渦巻き模様と正方形模様が浅浮彫で表されている (図11)。もう1体 (INV. M0455_2015.scu.19) では内側の装飾部分は4段に分けられ、端の段はやはり対のアーチと三角形、内側の2つの段の片方にはギリシア十字架が円に収められ、その円の上方左右を囲むように、葡萄をくわえた対の鳥が表されている (図12)。十字架の位置と鳥、そして端のアーチの段の高さの違いから、十字架の側が死者の頭の側であると推測される。ギリシア十字の下段には2つの渦巻と2つのロゼット模様が左右上下交互に並び、その4つの円形モチーフの中央に小さなギリシア十字架が表されている。下の端の段の対のアーチの間にやはり小さなギリシア十字架、そしてアーチの端には対の鳥を見つけることができる。

ほぼ完形を残すもう1例 (図13) は、上記2例よりも小型である⁽²¹⁾。短辺側の片方の端9~10cmは装飾がなくそのままに残されている。もう片側



図11 ニーム、ロマニテ博物館、墓彫刻
[INV. M0455_2015.scu.17]



図 17 アプト、司教座聖堂クリプト、祭壇卓

る解釈を試みている。

確かに、これまでも見てきたように、初期中世のキリスト教彫刻にロゼット模様が頻繁に登場する。とはいえ、クリスモンや十字架のような明確なシンボルであったと結論付けることは控えるべきであると考えられる。円で囲まれたクリスモンや十字架との形態的な類似から、キリスト教にふさわしいモチーフとして積極的に用いられ、さらにはキリスト教的なモチーフであると認識されていった現象は確かに存在した。その背景としては、後述するように、ロゼットは非常に古い時代から土着的な工房に存在するモチーフであり、また比較的表現が安易な造形であったため、古代ローマの彫刻技術が衰退していった西方キリスト教圏内において、各地の地元工房の彫刻モチーフのレパートリーとして大変好まれたという事情が想定される。

実際、クリスモンや十字架の代理としてロゼット模様が使われている初期中世の作例は少なからず存在する。5-6世紀のガリア南西部のいわゆる「アキテーヌの石棺」群では、明らかにクリスモンの位置に6弁ないし12弁のロゼット模様が表されている⁽³⁰⁾。あるいはアプト（ヴォークリューズ県）のサンタンヌ司教座聖堂のクリプトに現在保存されている祭壇卓においても、クリスモンの場所に12弁のロゼットが表されている（図17）⁽³¹⁾。この祭壇はプロヴァンス地方に特徴的な祭壇卓群に属するが、それらの典型的な装飾には、キリストと12使徒がクリスモンや羊、鳩、葡萄蔓などで象徴的に表されている。よってアプトの祭壇卓のロゼットの12弁という数に、12使徒という象徴性を読み取ることも不可能ではない。あるいは、ランゴバルド王国時代のフェレンティッコ（イタリア国ウンブリア州テルニ県）のサン・ピエトロ・イン・ヴァッレ聖堂の祭壇（739年以前）⁽³²⁾や、チヴィダーレ・デル・フリウリ（フリウリ＝ヴェネツィア・ジュリア州ウーディネ県）の司教座聖堂の祭壇（737-744年）⁽³³⁾にも、4~12の多様な弁数のロゼット模様が描かれている。再臨のキリストや天使たちの周辺に散りばめられたこれらのロゼットに、天の星々、光といった象徴性を見ることもできるかもしれない。前述の初期中世の状況を背景に、ゲルマン系キリスト教王国領域の美術に頻繁にロゼット模様が用いられ、それらがキリスト教的な

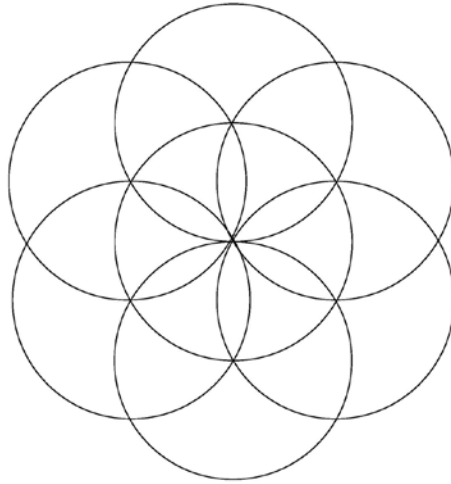


図 18 コンパスによる 6 弁ロゼット模様の作図

モチーフと認められていたことは確かだと言える。しかし、あくまでもそれぞれの地元工房においてキリスト教的に認識され愛用されたという状況であり、ロゼット模様がクリスモンや十字架のようなキリストのシンボルとして存在していたと見做すことはできない。初期中世の作例を概観するならば、ロゼット模様が使われるシチュエーションは実に様々であり、キリストのシンボルとしての共通認識をそこに見ることは難しい。

ソワイヨンの石板やニームの角柱に残された未完成のままの装飾の刻線から、6 弁のロゼットの作図の過程を明確にうかがうことができる。コンパスを用いて、同じ直径の円 7 つを重ねることによりモチーフは作図されている。つまり、ひとつの円の円周上にコンパスの軸を置き、同直径の円をもう 1 つ描く。交わったところにまたコンパスの軸を置き、さらに同直径の円を描く。そうして最初の円周上の 6 か所にコンパスの軸は置かれることとなり、円の内部に同じ直径の円の円弧を重ね合わせた 6 弁のロゼットが作られる (図 18)。12 弁のロゼットは円周上の交差点の中間点にコンパスの軸を置くことで簡単に作図される。

コンパスによりこのように表されたロゼット・モチーフは、時代的にも地域的にも非常に広い範囲で分布しており、南ガリアでは、第一鉄器時代の例が指摘される。トゥリエス遺跡 (アヴェイロン県サン＝ジャン＝エ＝サン＝ポール) の英雄崇拜の聖域で 2008 年からの発掘により発見された一群の石柱装飾 (前 7～前 5 世紀) には、浅浮彫や刻線の装飾が施されているが、コンパスで作図した 6 弁ロゼットや同心円はそのうちの重要モチーフとなっている (図 19)⁽³⁴⁾。

南ガリアのローマ時代においても、墓碑や祭壇にロゼット模様は頻繁に用いられている。とくにピレネー山系産大理石を用いた墓彫刻群には、ロゼット、同心円、分割円など、円形モチーフが多用されている⁽³⁵⁾。上半身だけで簡略化された正面向きの直立肖像、アーチ、線刻、など

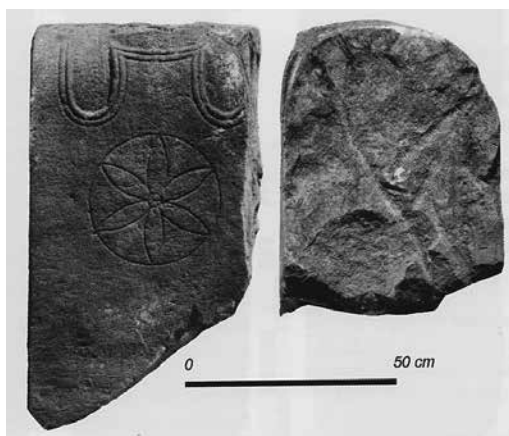


図19 サン＝ジャン＝エ＝サン＝ポール、トゥリエス遺跡、装飾石柱 (Cl.: Ph. Gruat)



図20 カザリル＝ラスペーヌの小教区教会の後陣の壁に再利用されている墓碑彫刻 (Cl.: A. Beyrie)

複数の典型モチーフと組み合わせられて円形モチーフが頻繁に使われ、非常に均質的な彫刻作例群を成している (図20)。これらの多くは教会堂の壁の中に再利用された状態で発見されており、単に建築石材として利用された場合もあったであろうが、装飾部分は良く見えるように配置されている例が多く、祭壇の下から発見されている例もあり⁽³⁶⁾、これらの彫刻について「異教」という認識はおそらくなかったのではないかと推測される。アーチや円形モチーフは、簡略化された正面向きの着服の人物像とともに、古代キリスト教時代のもたと認識されても違和感のない装飾である⁽³⁷⁾。

一般的に、古代におけるロゼット模様の象徴性については、渦巻き模様やスヴェスティカ模様同様に、光の象徴と解釈される場合が多い。たとえば、三日月とともにロゼット模様が表される作例が、旧ケルト文化圏のローマ時代の石造彫刻に多数指摘されるが、この場合、ロゼットは太陽、星、光を表すと考えることは妥当であろう⁽³⁸⁾。しかし、文字資料の裏付けがない場合、象徴性の解釈は常に仮定に留めざるを得ない。ヘロデ朝からローマ時代 (前1世紀末～後3世紀) のユダヤの石棺や石製骨箱⁽³⁹⁾は、ロゼット模様が代表的な装飾であり、その象徴性について多く論じられてきているが、E. R. グッドイナフらが提言した太陽、神の光、希望といった象徴性の解釈については⁽⁴⁰⁾、その後多くの研究者により却下され、L. Y. ラーマニなどは、むしろ純粋な装飾であり象徴性をそこに見るべきではないという立場をとっている⁽⁴¹⁾。

一方、木彫彫刻との関連性は、それぞれの時代・地域のロゼット装飾の作例について、考慮すべきであろう。古い時代の木彫彫刻が現代まで保存されることはまれであり、その影響関係において立証が難しいことは否めないが、前述のユダヤの石造骨箱や石棺のロゼット模様については、現存する同時代の木製石棺の模様との類似性から、木彫彫刻の影響が指摘されている⁽⁴²⁾。



図21 ギャップ（オート＝アルプ県）の県立博物館に所蔵される
アルプスの峡谷地域ケラの木彫り工芸作品群

実際、ギャップ（オート＝アルプ県）の県立博物館に保存される近世の南アルプス山岳の峡谷地域ケラの木彫工芸作品群（17～18世紀）⁽⁴³⁾に多用されるロゼット装飾を目の前にして（図21）、古代ユダヤや「西ゴート」の石造彫刻の斜め彫りのロゼット模様との様相の類似に驚かされる。あるいはメロヴィング朝時代の石膏棺群は木製の型を使って造形されているが、その事例からも、木工彫刻領域でロゼットや円模様が愛用されていた状況をうかがえるであろう。

結びとして

地元工房において古くからある装飾モチーフが極めて長期間にわたり使われている状況は、初期中世の作例の年代比定を難しくさせてきた。1959年のF. ブノワのプロヴァンス地方の初期中世彫刻研究論文⁽⁴⁴⁾に反論するかたちで、M. ヴィエイヤール＝トロイクロフは、本稿でも論じたニームの墓彫刻群などのプロヴァンス地方の作例は、ロマネスク時代末期の「擬古的な」彫刻作品であると提言した⁽⁴⁵⁾。1961年の論文において、クロール（ドルドーニュ県）由来の墓標が、ロゼット模様や同心円模様などメロヴィング朝時代のモチーフを使い古い石棺の形を模したゴシック時代の「擬古的な」墓廟であること、さらにフランス西部に残されている数多くの同様の墓彫刻の作例を挙げながら、13～14世紀にゴシック様式の発展と同時に存在する擬古主義的な潮流が存在したことを指摘し、プロヴァンスの彫刻群を同様の擬古的な作品群であると断言した。M. ヴィエイヤール＝トロイクロフのこの挑発的な論文に対して、M. デュルリアは、スペインにも13～14世紀の埋葬美術に同様の擬古的な作例があることを指摘する一方で、南東地域の状況は南西部とは異なること、南西部のように時代は下らないと反駁している⁽⁴⁶⁾。しかし、1984年の論文においても、M. ヴィエイヤール＝トロイクロフは、プロヴァンスの彫刻についての自説を保持している⁽⁴⁷⁾。その後、プロヴァンス初期中世の彫刻についての研究は進み、M. ヴィエイヤール＝トロイクロフの説を踏襲する研究はほぼないとしても、ニームの墓彫刻をはじ

めとして、彼女がロマネスク末期に年代を繰り下げた作品に対しては、研究者たちは不思議なほど消極的な取り扱いをしてきているという状況は否定できない⁽⁴⁸⁾。

本論考では、ニームのギュイヌメール遺跡の考古学調査で2016年に発見されたロゼット装飾の角柱を出発点として、同時代と推定されるローヌ川下流領域に残されている作例群、さらにはゲルマン諸王国領域の作例に比較を広げ、ロゼット装飾が多用されるようになった状況について考察を行った。初期中世のとくに地元工房においては、彫刻技術の退化の一方で、古代モチーフの存続、そして意味の忘却が徐々に進行していった⁽⁴⁹⁾。そうした時代背景において、あまり高度な技術は必要ではなく、キリストのシンボルと形態が類似したロゼット・モチーフが好まれたのは当然であった。

コンパスにより作図されたロゼット装飾は、南ガリアにおいてケルト時代から使用され、ローマ時代も継続し、ローマ帝国の瓦解後は、キリスト教諸王国において目立って頻繁に用いられた。こうした現象はガリア東南部だけではなく、西南部も、あるいはケルト＝イベリアの土着工房を引き継いでいるイベリア半島も同様であった⁽⁵⁰⁾。実際、土着的な装飾モチーフとして、ロゼットほど時代的にも地域的にも広範囲に現れるモチーフはないのではないだろうか。地中海地域の東も西も、ヨーロッパの北も南も、各地の地元工房で使われてきた装飾模様であった。木彫工芸の地元工房との関係は、古い時代において実証することは難しいが、西ヨーロッパの初期中世を通して、木彫彫刻が土着的な装飾モチーフの継続に大きな役割を果たしていたであろうという仮説は、興味深い問題意識として今後さらに検証する必要があると考える。

ロゼットは空間的にも時間的にもあまりに広く分布するモチーフであるが、ニームのギュイヌメール遺跡の2体の角柱は考古学的なコンテキストを持ち、さらにニーム周辺からは同時代の類似した装飾の墓彫刻群が集中して残されており、古代末期から初期中世への時期のローヌ川下流領域の地元工房の活動についての貴重な情報を知らせる作例として位置づけることができる。

《注》

- (1) 筆者は2017年1月に当該石材遺物の現地調査を行い、簡単な報告書を発掘担当のINRAP（考古事前調査国立機関）に提出している：Y. Narasawa, « Deux piliers de chancel décorés », in M. Rochette (dir.), *Occitanie, Gard, Nîmes – 1 Rue Guynemer : une nécropole de la fin de l'Antiquité à l'origine d'une église paléochrétienne, Rapport d'opération de fouille archéologique*, Inrap Méditerranée, 2018, vol. 2, p. 56-60.
- (2) M. Rochette (dir.), *Occitanie, Gard, Nîmes*… , vol. 1-4. 現在この遺跡についてのモノグラフィーの出版がM. ロシェットにより準備されている。
- (3) J. Grimaud, in *Occitanie, Gard, Nîmes*… , vol. 3, p. 69-74.
- (4) 古代から初期中世の囲み（カンケッリ）の形態・装飾については、筆者が研究代表者として、以下の科学研究費助成により研究を行っている：平成29～31（2017～2019）年度【科学研究費：基盤C】『初期中世の内陣障壁（カンケッリ）とその装飾に関する研究』JSPS 科研費JP17K02321。
- (5) 角柱が発見された墓からは、直径43cmの円柱の断片や墓碑、さらに建築石材が再利用されていた形で発見されている。墓碑は紀元後1世紀中ごろに年代推定されている：M. Christol, in *Occitanie, Gard, Nîmes*… , vol. 2, p. 53.

- (6) 角柱が発見された墓 [SP1165] については放射性炭素年代測定による分析がなされ、その年代と考古学層位から、11~12世紀という年代が導き出されている。この分析結果については M. ロシェットが現在準備中のモノグラフィーにて詳細に報告されるが、本論文のために最新情報を提供いただいた M. ロシェット氏 Madame Marie Rochette, INRAP とその発掘チームにここで深く謝意を表す。
- (7) 2体の断片は、その他のアルルの複数の石造遺物と共に、1870~80年代にジュネーブの博物館に寄贈され、現在もそのコレクション内に収められている：W. Deonna, in *Genava*, V, 1927, p. 133, no. 312 et 313 ; F. Benoit, « La basilique Saint-Pierre et Saint-Paul à Arles : étude sur les cancels paléochrétiens », *Provence historique*, 1957, p. 8-21 ; Y. Codou, in *D'un monde à l'autre. Naissance d'une Chrétienté en Provence IVe - VIe siècle, Catalogue de l'exposition 15 septembre 2001 - 6 janvier 2002*, Musée de l'Arles Antique, Arles, 2001, p. 212-213.
- (8) P.-A. Février, in *Topographie chrétienne des cités de la Gaule : des origines au milieu du VIIIe siècle*, III, p. 84.
- (9) *CIL*, XII, 936.
- (10) 2断片の大きさは、両者ともに 62 x 70cm であり、厚さは 11~12cm。石灰岩製。
- (11) J. Dupraz, Ch. Fraisse, *Carte archéologique de la Gaule : 07 L'Ardèche*, Paris, 2001, p. 398.
- (12) 石板の幅は 108 cm、厚さは 18 cm、残されている長さは 115 cm : Y. Narasawa, *Les autels chrétiens du Sud de la Gaule : 5e-12e siècles*, (*Bibliothèque de l'Antiquité tardive* 27), Brepols Publisher, Turnhout, 2015, cat. no. 385.
- (13) Dupraz, Ch. Fraisse, *Carte archéologique...*, p. 398.
- (14) M. Buis, « Les sculptures carolingiennes de l'église de Soyons (Ardèche) », *Revue du Vivarais*, 88, 1984, p. 65-72.
- (15) 現在の聖堂は 11 世紀末ないし 12 世紀初頭の建造だが、その起源はさらに古くさかのぼる。アプシスの凱旋門を支える柱は再利用材である：R. Saint-Jean, in *Vivarais Gévaudan romans*, Saint-Léger-Vauban, 1991, p. 206 ; C. Fabre-Martin, *Églises romanes oubliées du Vivarais, Montpellier*, 1993, p. 239-241 ; Dupraz, Ch. Fraisse, *Carte archéologique*, p. 316-318.
- (16) *CIL*, XII, 1213 ; J. Biarne, in *Topographie chrétienne des cités de la Gaule*, III, p. 101-108 ; G. Barruol, J. Guyon, in *D'un monde à l'autre*, p. 220-221 ; C. Treffort, in *Les temps mérovingiens. Trois siècles d'art et de culture (451-751)*, Paris, 2016, p. 148-149.
- (17) A. Michel, « Nîmes et ses tombeaux chrétiens », *Mémoire de l'Académie de Nîmes*, 1880, pp. 1-41 ; R. Rey, « Sculptures préromanes du musée de Nîmes », *Pallas*, 5, 1957, p. 53-87 ; J.-L. Fiches, A. Veyrac, *Carte archéologique de la Gaule : 30/1 Nîmes*, Paris, 1999.
- (18) これらの墓彫刻の資料提供および写真撮影許可をいただいた、主任学芸員のドミニク・ダルド氏 Madame Dominique Darde, Conservateur en chef du patrimoine, Directrice du Musée archéologique de Nîmes およびロマニテ博物館研究員セシル・カリエ氏 Cecile Carrier, Chargée d'étude au musée de la Romanité de Nîmes に謝意を表す。
- (19) 博物館の目録番号としては以下である：INV. M0455_932.3.1, INV. M0455_941.1.11, INV. M0455_2015.scu.17, INV. M0455_2015.scu.19, INV. M0455_2015.scu.20, INV. M0455_2015.scu.21, INV. M0455_2015.scu.22, INV. M0455_2015.scu.23, INV. M0455_2015.scu.24, INV. M0455_2015.scu.25。他に、その可能性が疑われるが判別できないものが 2 体、指摘される：INV. M0455_2015.scu.14, INV. M0455_2015.scu.26。
- (20) INV. M0455_2015.scu.17 (171 x 44 x 13.5cm)、INV. M0455_2015.scu.19 (171 x 50.5 x 12.5cm)。このうち前者は上面の長辺の一辺が欠落しており、装飾から復元される幅は 52~53cm 程度。
- (21) INV. M0455_941.1.11 (98.5 x 36 x 12.5)。子供の墓の蓋であった可能性が考えられるが、墓碑であった可能性も除外はできない。
- (22) Germer-Durand, *Mémoire de l'Académie du Gard*, 1863 : Cf. A. Michel, « Nîmes et ses tombeaux

- chrétiens »…, p. 30.
- (23) G.-R. Dalahaye, « Les sarcophages mérovingiens : Sarcophage de pierre », in *Naissance des arts chrétiens : Atlas des monuments paléochrétiens de la France*, Paris, 1991, p. 288-299 ; M. Coppola et A. Flammin, « Les sarcophages au musée lapidaire du baptistère Saint-Jean de Poitiers. Classement typologique et étude iconographique », *Bulletin de la société des antiquaires de l'Ouest et des musées de Poitiers*, 5e série, VIII, 1994, p. 256-257.
- (24) M. Durand-Lefebvre, « Les sarcophages mérovingiens de Paris », *Cahiers archéologiques*, 1952, p. 168-175 ; D. Fossard, M. Vieillard-Troikouroff, E. Chatel, *Recueil général des monuments sculptés en France pendant le haut Moyen Age (IVe - Xe siècles)*, I, Paris et son département, Paris, 1978 ; *Collections mérovingiennes - catalogues d'art et d'histoire du musée Carnavalet II*, Paris, 1985 ; P. Périn, « Les sarcophages mérovingiens : Sarcophage de pierre », in *Naissance des arts chrétiens* …, p. 299-305.
- (25) F. Benoit, « Le sarcophage de Lurs en Provence, situation dans l'art géométrique barbare », *Cahiers archéologiques*, 1959, p. 27-70 ; J. Puig i Cadafalch, *L'art wisigothique et ses survivances : recherches sur les origines et le développement de l'art en France et en Espagne du IVe au XIIIe siècle*, Paris, 1961, p. 73, pl. XX.
- (26) P. de Palol, G. Ripoll, *Les Goths, Ostrogoths et Wisigoths en Occident, Ve - VIIIe siècle*, Paris, 1990.
- (27) A. Flammin, « Le décor installé dans le baptistère de Poitiers au VIIe siècle », in *Le Baptistère Saint-Jean de Poitiers. De l'édifice à l'histoire urbaine*, sous la direction de B. Boissavit-Camus, Turnhout, 2014, p. 359-399.
- (28) A. Flammin, « Le décor installé dans le baptistère de Poitiers au VIIe siècle »…, pp. 387-390.
- (29) P. Reuterswärd, "The Forgotten Symbols of God", *Konsthistorisk tidskrift*, LI, 1982, pp. 103-125.
- (30) M. Durliat, C. Deroo, M. Scellès, *Recueil général des monuments sculptés en France pendant le haut Moyen Age (IVe - Xe siècles)*, IV, *Haute-Garonne*, Paris, 1987, cat. no. 29, 108, 172, 173, 174, 176.
- (31) Y. Narasawa, *Les autels chrétiens...*, cat. no. 19.
- (32) *Corpus della scultura altomedievale 2*, a cura di J. Serra, Spoleto, 1961, cat. no. 11.
- (33) *Corpus della scultura altomedievale 10*, a cura di A. Tagliaferri, Spoleto, 1982, cat. no. 311-314.
- (34) Ph. Gruat et coll., « Découvertes de stèles protohistoriques en Rouergue méridional : introduction à l'étude du site des Tourières (Saint-Jean et Saint-Paul, Aveyron) », *Documents d'archéologie méridionale*, n° 31, 2008, p. 97-123 ; M. Py, *La sculpture gauloise méridionale*, Paris, 2011, p. 45-49 ; Ph. Gruat, « Le sanctuaire héroïque des Tourières », *Dossiers d'Archéologie*, n° 367, 2015, p. 44-47.
- (35) A. Laurens は博士論文 (*Les mentalités des populations d'Aquitaine méridionale à l'époque romaine : le témoignage des monuments funéraires décorés et/ou inscrits*, Thèse de doctorat en Histoire et archéologie des mondes anciens, Université de Pau et des Pays de l'Adour, 1998) において 400 を超える装飾付きの石製骨箱群をカタログ化した (筆者は未確認)。ピレネー山系地域の墓彫刻群について筆者が主に参照した参考文献は以下となる : J.-J. Hatt, « Les monuments funéraires gallo-romains du Comminges et du Couserans », *Annales du Midi*, 1942, no. 215/216, 1942, pp. 169-254 ; A. Laurens, « Les monuments funéraires des Pyrénées centrale, objets de remploi postérieurement à l'Antiquité », *Revue de Comminges*, 115, 1999, p. 427-470 ; Id., « Deux aspects méconnus de l'iconographie funéraire des Pyrénées centrales à l'époque romaine : les métiers et les récipients accompagnant la représentation des défunts (milieu du IIe siècle - début du IVe siècle) », *Revue de Comminges*, 116, 2000, p. 339-368 ; R. Sablayrolles, A. Beyrie, *Carte archéologique de la Gaule, 31/2 Le Comminges (Haute-Garonne)*, 2006, p. 82-92 et passim.

- (36) É. Espérandieu, *Recueil des bas-reliefs de la Gaule romaine*, XV Paris, 1966, no. 8851.
- (37) キリスト教聖堂に再利用される場合、アーチやロゼットの他、たとえばユピテル神を表す車輪や、バックス信仰に結びつくブドウ模様など、キリスト教的に認識されやすいモチーフが選択されることが多い。
- (38) F. Cumont, *Recherches sur le symbolisme funéraire des romains*, Paris, 1942, p. 177-252.
- (39) ロゼット模様は斜面彫りが多く、コンパスを使った正確な円の重なりから作図され、6弁ロゼットとその変形が主となっている : L. Y. Rahmani, *A catalogue of Jewish Ossuaries : in the collections of the State of Israel*, Jérusalem, 1994.
- (40) E. R. Goodenough, *Jewish symbols in the Greco-Roman period*, I, 1953, p. 176 ; IV, 1954, p. 197-198.
- (41) L. Y. Rahmani, *A catalogue of Jewish Ossuaries ...*, p. 25-28.
- (42) V. Vassl, « Les mosaïques de Magdala (Galilée) : motifs géométriques et floraux », in *Art et archéologie du Proche-Orient hellénistique et romain. Les circulations artistiques entre Orient et Occident*, sous la direction de C. Arnould-Béhar, V. Vassal, BAR International Series 2897, 2018, vol. 2, p. 95-96.
- (43) D. Glück, *Le Queyras I. Les collections ethnographiques*, Musée départemental de Gap, 1991.
- (44) F. Benoit, « Le sarcophage de Lurs en Provence... » .
- (45) M. Vieillard-Troïekouff, « Survivances mérovingiennes dans la sculpture funéraire du Moyen Age », in *Art de France*, 1961, p. 264-269.
- (46) M. Durliat, « Archaïsme de la sculpture funéraire : Vieillard-Troïekouff (Mme May), Survivance mérovingiennes dans la sculpture funéraire du Moyen âge, dans Arts de France, I, 1961 », *Annales du Midi*, 74, n° 57, 1962, p. 85-87.
- (47) M. Vieillard-Troïekouff, « Le tombeau du duc d'Alsace, Etichon, fondateur du monastère de Sainte-Odile : les tombeaux romans trapézoïdaux et ceux décorés d'arcatures », *Bulletin de la Société nationale des antiquaires de France*, 1984, p. 55-62.
- (48) ニームの墓彫刻群は非常に重要な作例であるにもかかわらず、A. Michel の 1880 年の研究以降、総括的な研究がなされていない。アルルの初期中世の墓彫刻も同様であり、同作例について筆者は別の機会に論じる予定である。
- (49) 拙稿「初期中世美術における『古代』、『古典』、『擬古』——ガリアの柱頭を中心とする事例からの考察」『古典主義再考 I : 西洋美術史における「古典」の創出』、木俣元一・松井裕美編、中央公論出版、2021年、p. 77-104.
- (50) J. Puig i Cadafalch, *L'art wisigothique et ses survivances...*, p. 53-62.

Early Medieval Stone Carvings From the Lower Rhone Region of France:
A Study of Rosette Motifs

Yumi NARASAWA

Abstract

It can be difficult to date or verify the origin of early medieval Western Europe stone carvings, especially if they were originally crafted in local workshops. This report compares the results of an investigation of stone carvings excavated in 2016 from the archeological site of Rue Guynemer, Nimes, to examples found in the lower Rhone region. The author analyses how the decorative motif, or rosette, became more common in the repertoire of early medieval sculptors, especially those operating regional workshops, through detailed comparative research of several regions across different epochs.

Keywords : Early Middle Ages, sculpture, ornament, rosette, Nimes, Gaul, Cancelli